



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 対話の原型と対話原理の原点 : 「生活のなかの言葉と詩のなかの言葉」におけるイントネーション                              |
| Author(s)    | 西口, 光一  |
| Citation     | 多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2021, 25, p. 1-12                         |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/79097">https://doi.org/10.18910/79097</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 対話の原型と対話原理の原点

—「生活のなかの言葉と詩のなかの言葉」におけるイントネーション—

西口 光一\*

### 要 旨

バフチンの対話原理は、言語哲学の側面と文芸研究理論の側面を有しており、両者が渾然一体となっている。本稿は、言語哲学の側面を中心に対話原理を探究する試みの一部である。本稿では、バフチンが生活の中の言葉の社会的交通性を綿密に論じ、文学の中の言葉もそのように社会的交通にあるものとして芸術（文学）の社会的交通論を展開している「生活のなかの言葉と詩のなかの言葉」（バフチン、1926/2002）を採り上げるが、主に生活の中の言葉の社会的交通論に注目して、バフチンの議論を再解釈する。同論考でバフチンは、イントネーションに注目し、生活における社会的交通は「クロス」に支えられたイントネーションの要因と「符牒」としての発話の要因が関与したヒューリスティックスとして運営されていると説明し、イントネーションが聞き手への志向と語られている対象への志向を生み出している事情を論じて、生活の中の言葉の社会的交通論を提示する。バフチンの発話の社会的交通論は十分に説得的ではあるが、イントネーションと発話に基づくヒューリスティックスと生活（ロシア語では“жизнь”）の関連が十分に論証されていない。本稿では、その主要な論点として、バフチンが論じるイントネーションに注目し、言葉を載せて運ぶ、生きることの息吹を内包したイントネーションが、われわれを物質的な領界から脱して人として生きる社会文化的領界に導いて、その世界で一つの人格として生きることを可能にしていること指摘する。

【キーワード】対話、対話原理、発話の社会的交通論、イントネーション、ヒューリスティックス

### 1 はじめに

バフチンは、文芸研究者とも言語哲学者とも言われる。バフチン自身は自分のことを言えれば哲学者あるいは思想家であると言っており（桑野、2020, pp.13-14）、バフチン研究者たちもバフチンをそのように位置づけている（ホルクウィスト、1994、トドロフ、2001、桑野、2020）。その思想の中核は、対話原理として知られているわけであるが、対話原理には言語の哲学と文芸研究の理論という2つの側面があり、両者がいわば渾然一体となっている。一方で、バフチンをめぐっては学校教育や言語教育さらにはカウンセリングなどの実践の分野で引き合いに出さ

れることがますます多くなっている。そして、そこで注目されているのはバフチンの言語哲学の側面なのだが、そうした言語哲学としての対話原理の総体が十分に共通理解されないままに応用の議論が先行している観がある。

筆者は第二言語の習得と習得支援という実践的な関心からバフチンの対話原理を一旦整理したが（西口、2013）、それはプラグマティックな観点からの当面の整理であって、対話原理をクリティカルに論じたものとはなっていない。しかし、対話原理の実践への応用の可能性に以前にも増して関心が寄せられるようになった現在、言語哲学としての側面を中心に対話原理を改めて整理し直す必要があると思われる

\* 大阪大学国際教育交流センター教授

る。本稿は、そうした問題意識の下での対話原理探究の試みの一部である。

本稿ではバフチンの最初の研究的な論考である「生活のなかの言葉と詩のなかの言葉」（バフチン、1926/2002、以降バフチン論考と呼ぶ。また、文献としては単に「バフチン」として示す）に注目する。同論考でバフチンは言語哲学を絡めながら文学研究の社会学的方法を論じているが、邦訳で約50ページの論考にバフチンの生涯の視座となる対話原理の重要な諸視点が萌芽的な形ながら凝縮されていると見られるのである。本稿はこのバフチン論考を改めてクリティカルに検討し、バフチンの言う対話の原型とその中核及び対話原理の原点を示そうとする試みである。そして、最終的な議論の焦点は、イントネーションと絡めて言葉（発話）と生活の関係を考究することとなる。

まず、第2章で、バフチン論考で主要テーマとして論じられている生活の中の言葉を採り上げその特性を明らかにする。そこでは省略三段論法が重要な要因として提起される。一方で、議論の最終部でバフチンが「枠外」（バフチンp.23）と言っていることに注意を促す。第3章では、生活の中の言葉の特性に関わる重要な要因としてバフチンが論じているイントネーションをめぐる議論をたどる。そのイントネーション論では、コロスの支えとイントネーションによる二方向の定位が重要な視点として提起される。そして、イントネーションと身振りを並置して、それらの社会的評価とイントネーションの客観性と能動性を指摘した上で、評価のイントネーションを重要な要因として生活の中の言葉の社会的交通の様態を説明している。続いて、バフチンは、生活の中の言葉について提示した「シナリオ」というメタファーを文学の中の言葉の場合にもあてはめて、評価のイントネーションに包まれる話し手と聞き手と対象の3者と文学の中の言葉の場合の作者と読者と主人公の3者を対応させて、芸術（文学）の社会的交通論を展開する。これについては第4章で簡潔に論じる。第5章では、本稿の焦点として、イントネーションと絡めて対話と生活の関係を考究する。バフチン論考の原典では、「生活」は“жизнь”（ローマ字表記では“zhizn”）となっている。“жизнь”は英語の“life”にあたる。ここで注意を要するのは「生活」という訳語である。「生活」という日本語は“жизнь”や“life”の意味を正確に反映していない。バフチン論考

の文脈で“жизнь”や“life”をより適切に言うとするれば、「生きること」とでもするほかない。第5章ではこうした事情を踏まえながら対話と生活（жизнь）の関係を検討して本稿の主要テーマに迫っていく。

議論を始めるにあたりいくつか注釈をしておく。まず、「生活のなかの言葉」と「詩のなかの言葉」についてである。バフチンは「生活のなかの言葉」の対比として「詩のなかの言葉」と言っているが、バフチンが言っている詩は、桑野（2020）も指摘しているように、文学一般を指している。その後のバフチンの対話原理の展開を見るならば、ここは文学に限定しないで学問などをも含めた文芸としたいところであるが、今回のバフチン論考に限るならば文学としておくのが適当である。また表記に関することだが、研究対象の邦訳では「生活のなかの言葉」というふうにかいた表記になっているが、本稿の地の文では読みやすくするために「生活の中の言葉」や「文学の中の言葉」とする。後者が「文学の…」となっているのは上のような理解に基づく。今一つは、「言葉」と「発話」についてである。ロシア語ではおのおの“слово”（slovo）と“высказывание”（vyskazyvaniye）で、前者は「言葉」や「語」となり、後者は「発話」で、バフチンの議論では対話的交通の単位を示す用語である。バフチン論考では微妙な使い分けが行われているが、本稿の目的においては両者の違いを取り立てて議論する必要はないので、おおむねバフチンの使い分けに準じた形で議論を進めていく。

## 2 生活の中の言葉の特性

### 2-1 生活の中の言葉への注目

バフチン論考は以下の一節から始まる。

文学研究においては社会学的方法の適用は、**文学史**の問題の検討にほぼかぎられており、いわゆる**理論的詩学**の問題—芸術的形式やそのさまざまな契機、文体、その他にかかわる一連の問題—には、この方法はほとんど適用されていない。（バフチンp.7、太字強調は原著、以下同様）

社会学的方法の必要性が叫ばれ、一部で社会学的方法として適用の試みがなされているが、社会学

方法は文学研究の方法論として十分に展開されていないというわけである。こうした問題意識の下に同論考の課題をバフチンは以下のように定める。

本論の課題は、詩的発話の形式を、言語を素材として実現されるこの特殊な美的交通の形式として理解しようとするところにある。だがそのためには、芸術の外部—つまり通常の生活のなかでのことば遣い—における発話のいくつかの側面をもう少し詳細に検討しておかなければならない。すでに日常生活のことば遣いのなかに、将来の芸術的形式的基礎、潜在力（可能性）が宿されているからである。言葉の社会的本質がここではよりくっきりと明瞭に出ており、発話と周囲の社会的環境との結びつきが分析しやすくなっている。（バフチン pp.15-16、傍点強調は筆者、以下同様）

こうして生活の中の言葉への注目が表明され、同論考の半分を越える中心部で生活の中の言葉をめぐる議論が展開されるのである。

## 2-2 「生活の中の言葉」論の端緒

「生活の中の言葉」論をバフチンは以下のような一節から始める。

生活のなかの言葉がそれ自体で充足していないことは明白である。それは言語外の生活状況のなかから生じ、生活状況とのきわめて緊密な結びつきを保っている。そればかりか、言葉が生活そのものによって直接に補完されており、生活から切りはなされれば意味を失わざるをえない。（バフチン p.16）

そして、有名な「tak」の例を検討材料として提示する。

二人が部屋にいる。黙りこくっている。ひとりが話す、「Tak!」と。もうひとりは何にも応えない。〔この場合の tak は英語の well に近い〕（バフチン p.17）

バフチンの説明によると、話の現場にいないわれわれにはこの「会話」はまったく理解できない。「そ

れだけを孤立させてとらえた発話『tak』は空虚であり、まったく意味がない。だがにもかかわらず、…わずか一語からなる、二人のこの独特なやりとりは、十分に意味に満ちており、十分に完結している」（バフチン p.17）と言う。そして、当事者たちによるこの会話を支えているのは言語外のコンテキストであるとし、その言語外のコンテキストとして次の3つの要因を挙げている。

- (1) 話し手どうしに共通する空間的視野（見えているものの共通性—部屋、窓その他）
- (2) 状況にかんする、双方に共通する知識や理解
- (3) この状況にたいする、双方に共通する評価  
（バフチン p.18）

そして、この3つの要因に従って、当該の会話の成立基盤を以下のように説明している。

やりとりの瞬間、双方の話し手は窓の外を見やり、雪がふりだしたのに気づいた。双方とも、もう5月であり、とっくに春になるはずだということを知っている。さらに、双方とも、長引く冬にうんざりしている。双方とも、春を待ち望み、双方とも季節外れの降雪にがっかりしている。こうしたことすべて—「ともに見えているもの」（窓の外に舞い散る雪）、「ともに知っていること」（時は5月）、「評価が一致しているもの」（うんざりする冬、待ち遠しい春）—に、発話は直接に立脚しており、こうしたことすべてが発話の生きた動的な意味によって捉えられ、発話のなかに吸い込まれているのだが、ただしこの場合は、言葉で示されたり発話されたりはしないままになっている。雪は窓の外にのこり、日付は暦の紙の上のこり、評価は話し手の心理のなかにのこっているが、こうしたことすべては「tak」という言葉によって言外に示されている。（バフチン pp.18-19）

言うまでもないことと思われるが、この説明は、バフチンが読者に向けてこの「tak」の会話の状況を解説しているのではない。そうではなくて、こうしたことが会話の当事者においてあって、その上にこのわずか一言の「tak」の意味に満ちた完結したやり取りが成立していると説明しているのである。

## 2-3 生活の中の言葉の特性の捕捉

「tak」というわずか1語で成立する会話を顕著な例として挙げて、言外に示されているものあるいは言語外の視野に注目して、生活の中の言葉が意味に満ちて成立する事情を、バフチンはいくつかの観点で説明しようとしている。その観点はおおむね以下の3つにまとめられる。

### (1) 対話の連綿性

生活の中の言葉は、たいてい何かを指し示しているが、それよりもむしろ、「状況を積極的に引き継ぎ、発展させ、今後の行動の計画を示し、行動を組織することのほうが、はるかに多い」(バフチン p.19)。すなわち、後にバフチンが言っているように、発話はいずれも誰かに向けられており、向けられた相手における能動的応答的理解によって対話的に定位されて応答される(バフチン, 1952-53/1988)。いかなる発話も「途切れることのない言語コミュニケーションの一契機にすぎぬもの」(バフチン, 1929/1980, p.210)である。

### (2) 社会的評価あるいは社会的視野の省略三段論法

バフチンは生活の中の発話の意味の総体を仮に、言語的に実現された(表に出された)部分と、言外に示されている部分、の2つに分けている。そして、生活の中の発話は省略三段論法になぞらえることができると言う(バフチン p.20)。三段論法の例は、以下の通りである。

#### 三段論法

- (a) すべての人間は死を免れない。(大前提)
- (b) ソクラテスは人間である。(小前提)
- (c) ゆえに、ソクラテスは死を免れない。(結論)

省略三段論法とは、三段論法的前提を省略した論法ということで、上の(a)や(b)を省略して(c)を述べるといふような論法であり、生活の中での発話の仕方はそのような論法になぞらえることができるというのである。これはどういうことだろう。バフチンは以下の3点を挙げて説明している。

#### ① 基本的な社会的評価の一致

生活の中の発話は状況の参加者同士を、その状況と同じように知り、理解し、評価している共参加者

として常に結びつける(バフチン p.19)。

わたしが知っていたり、眼にしたり、欲したり、愛したりするものは、言外に示されえない。われわれ話し手全員が知っていたり、眼にしたり、愛したり、認めており、われわれ皆が共通性を見いだしているものだけが、発話において言外に示されている部分となる。(バフチン pp.20-21)

第1文は実際には「私だけが知っていたり…」の意味で、対話の参加者たちが潜在的にであれながしかの共通の基本的な社会的視野や基本的な評価に包まれていてこそ、省略三段論法を伴いながら了解可能な発話ができるということである。省略三段論法と言うと、個人が展開する論理を想像してしまうかもしれないが、ここに言うのはそのような個人によるものではなく、共通の基本的な社会的評価に基づくいわば社会的な省略三段論法である。

また、バフチンは基本的な社会的評価について次のように付言している。省略三段論法に関わる一つの重要論点である。

生活環境の特徴から直接に生じてくるすべての基本的な社会的評価は、ふつう発話されない。それらはこのグループの全員の血肉となっているのである。それらは行動や行為を組織しており、相当する事物や現象といわば癒着している。それゆえに、特別な言語表現を必要としない。(バフチン p.22)

そして、こうした社会的評価は、「個人的な情緒ではなく、社会的に理に適った必然的行為になっている」(バフチン p.21)と言う。

#### ② 基本的な社会的評価の上の個人的・心理的なもの

では、発話で示される個人的な視点はどこに位置づけられるのだろうか。バフチンによると、個人的・心理的なものは、上の基本的な社会的評価の上でこそ現実のものとなって実現することができるという。「個人的情緒のほうは、倍音としてのみ、社会的評価の基本トーンに伴うことができる。〈わたし〉は〈われわれ〉に依拠してはじめて、言葉のなかで自己を現実化できる」(バフチン p.21)のである。

### ③生活の中の言葉は「符牒」のようなもの

バフチンは「生活のなかの言葉はすべて、客観的・社会的な省略三段論法となっている。これは、おなじ社会的視野に所属している者だけが知っている「符牒」のようなものである。生活のなかの発話の特徴は、発話が言語外の生活のコンテキストのなかへ無数の糸で編み込まれており、そこから抜きだされるとほぼ完全に意味を失ってしまう点にある。それらの発話の身近な生活上のコンテキストを知らずしては、理解できない。」(バフチン p.21) と言っている。「符牒」はいくらそれを眺めて知ろうとしても、それが何を示しているのかはわからない。一方で、生活の中の言語活動に従事する者は、上でも言及したように、多かれ少なかれ同じ社会的視野に属している。生活の中の言葉が「符牒」だというのは、評価的な側面をも含めた可能な共通の社会的視野と発せられた「符牒」の意味の可能性を発話の行為を契機として「合算」しながら、現下の契機に当てはまる社会的視野とそれに整合的に嵌まる「符牒」という総体としての解にヒューリスティックに到達するという形で、われわれは生活の中の言語活動に従事しているということである。そして、その場合に、省略三段論法で前提が補助的に推論されなければならないように、社会的視野に属する多くの要因が総体としての解に至るために補充されるということである。

### (3) イントネーション

バフチンは、社会的視野や評価(社会的評価と個人的評価の両者を含む)というものの源泉をイントネーションに求めている。イントネーションによって社会的視野や評価が示され、評価的なイントネーションに包まれて発話は発せられ、評価的なイントネーションに包んで発せられた発話が了解されるということである。バフチンの説明は以下の通りである。

本質的な評価は、言葉の内容にはまったく含まれておらず、そこからは引きだせない…。評価がもっとも純粋に表現されるのは、イントネーションにおいてである。イントネーションは言葉と言語外コンテキストとを緊密にむすびあわせる。生きたイントネーションは言葉をいわば枠外に導き出す。(バフチン p.23)

かくして、生活の中の言葉に関わる枢要な要因と

してイントネーションが提起されるのである。そして、上の引用の最後の文中に言う「枠外」が、本稿第5章での議論の重要な論点となる。

## 3 イントネーション論

### 3-1 コロスの支えとイントネーション

バフチン論考では、イントネーションが提起されて以降、邦訳で約10ページにわたって、イントネーションをめぐる議論が展開される。まず、イントネーション論を始める最初のページでバフチンは次のように高らかに主張する。

イントネーションはつねに、言語的なものと非言語的なもの、言われたことと言われなかったことの境界上にある。イントネーションにおいては、言葉は生活と直接に接している。またなによりもまず、まさにイントネーションにおいて、話し手と聞き手は接している。イントネーションはとりわけ社会的である。(バフチン pp.24-25)

バフチンのイントネーション論を解説するマスターキーは、ここに言う「生活」(ロシア語では *жизнь* (zhizn), 英語では life) の意味とその内包にある。その点についての先の「枠外」とも絡めた議論は第5章で行うこととして、イントネーションをめぐるバフチンの議論を引き続きたどっておこう。

バフチンは上の引用の意味を「tak」の場合を例として以下のように説明する。

この例ではイントネーションは、話し手どうしに共通する、春の渴望や長引く冬への不満から生じていた。イントネーションも、その基本的トーンの明晰さや確実さも、言外に示されている評価のこうした共通性に立脚していた。共感の雰囲気に含まれてイントネーションは、この基本的トーンの枠内で自在に分化することができた。(バフチン p.25)

バフチンは「基本的なトーン」や「共感の雰囲気」を古代ギリシア劇の合唱隊と結びつけて「コロスの支え」(バフチン p.25) と呼ぶ。「コロス」は現代語の「コーラス」の語源になっているもので、古代ギ

ロシア劇のコロスは幕間で劇の背景や要約やテーマについての注釈をするのだが、その際だった特徴は劇中の一般大衆の代弁をしたり登場人物が劇中で語れなかったことを代弁したりすることである。バフチンはそのような特徴と結びつけてイントネーションの基底に「コロスの支え」があると言っているのである。観客はコロスに導かれそれに包まれるような感覚で劇の中に引き込まれて劇を鑑賞するのである。そして、生活の中の発話では、コロスに支えられたイントネーションが醸し出す基本的評価の共通性の上であってこそ、発話は確信に満ちた豊かなイントネーションを響かせることができるとバフチンは言う。以下の引用では、バフチンは具体的に示される発話のイントネーションを、コロスの支えに包まれた基本的評価の共通性というキャンバスに縫い込まれる刺繍に喩えている。

創造的で、確信に満ちた、豊かなイントネーションは、前提にされている「コロスの支え」を基礎にしてのみ可能である。それが無い場合には、…それは、笑っている者が、笑っているのは自分ひとりであることにふと気づくといったような、よくあるケースに似ている。…言外に示されている基本的評価の共通性とは、人間の生きた動的なことばがイントネーション模様を刺繍するキャンヴァスなのである。(バフチン pp.25-26)

### 3-2 イントネーションの二方向の定位

イントネーションの背後に自覚されることはないが確実に響くコロスの支えを見て取ったバフチンは、さらに、そうしたイントネーションが聞き手を巻き込んでいるだけでなく、語られている対象にも能動的に向けられていることを指摘する。

「tak」という言葉のイントネーションには、生じていること（降雪）にたいする受動的な不満だけでなく、能動的な憤激や非難もひびいていた。この非難は誰に向けられているのか。聞き手ではなく、誰かほかの者であることは明らかだ。イントネーションの動きのこの方向は、明らかに状況を外に開いており、**第三の参加者**に場所を提供している。非難は誰に向けられているのか。雪にだろうか。自然にだろうか。こと

によると、運命にだろうか。(バフチン p.26)

以下の一節では、「コロスの支え」に包まれてイントネーションが息づいて、二つの方向への志向を生み出している状況がよく示されている。

この場合（「tak」の場合、筆者注）イントネーションは、発話の対象にたいする生きた動的な関係——具体化された実際の責任者たる対象に呼びかけはじめているような関係——をきざきつつある。しかも、聞き手——第二の参加者——は、**承認や同調者**になるよう訴えられているかのようなのである。(バフチン pp.26-27)

### 3-3 イントネーション的隠喩

こうしたコロスの支えの議論に続いて、バフチンはやや神秘主義的な議論を挿入する。このあたりが第5章の議論の焦点ともなる。

生活のなかの興奮したことばづかいにおける生きた動的なイントネーションのほとんどすべては、対象や事物の背後にいる生きた参加者たちや先導者たちに話しかけているかのように発せられる。それには、**人格化の傾向**が高度に備わっている。もしイントネーションが先の例のようにある程度のイロニーによってやわらげられておらず、それが素朴で直接的であるならば、そこからは神話的形象や、呪い、祈りなどが生まれる。文化の初期段階はそうであった。これにたいし先の例のような場合に見られるのは、言語的創造のきわめて重要な現象——**イントネーション的隠喩**——である。イントネーションは、言葉が季節外れの雪の生きた責任者である冬を非難しているかのようにひびいている。この例に見られるのは、イントネーションの枠外には絶対にでない**純粋な**イントネーション的隠喩であるが、そのなかであって、まるで揺りかごのなかにいるかのように、通常の**意味論的隠喩**の可能性がまどろんでいる。この可能性がもし実現されたならば、「tak」という言葉は、「この**頑固な冬**ときたら、いっこうに**降参した**がらない。とっくに時期は来てるはずなのに」という、ほぼこのような隠喩的な表現に言い換えられるであろう。だが、イントネーションのなかに宿さ

れているこの可能性は、実現されないままである。発話は意味論的にはほとんど中身の無い副詞「tak」のままである。(バフチン pp.27-28)

この引用のカギ括弧内の「この頑固な冬ときたら…」が意味論的隠喩となっているわけで、イントネーションはそうした言語的に分節して表現される隠喩の拠り所を提供しているということである。そして、バフチンは一般論として次のように主張する。

生活のなかのことににおけるイントネーションは、一般に、語よりもはるかに隠喩的であり、そこにはいわばまだ古代の神話創造的な魂が生きている。イントネーションは、話し手の周囲の世界が生命をもった諸力でまだ満たされているかのようにひびいている。…イントネーションは、生命をもたぬ対象や現象を脅し、怒らせたり、あるいは愛したり、いつくしむ。(バフチン p.28)

このようにバフチンは、イントネーションはあたかも呪術的な力を有しており、その呪術の上に載ってこそ言葉はその意味作用を展開することができると考えていると見られるのである。さらにバフチンは、以下の引用のように、イントネーションと同じく身振りもコソスの支えを背景としてそのような呪術的な働きをするものだと見ている。

緊密な親縁関係が、イントネーション的隠喩を身振りの隠喩と結びつけている(言葉そのものも、当初は言語的身振りであり、身体全体の複雑な身振りの構成要素であったのである)。ここでいう身振りとは、顔の表情をも含む広義のものである。身振りは、イントネーションと同様、周囲の者たちのコソスの支えを必要としている。社会的共感の雰囲気のみ、自由で確信に満ちた身振りが可能である。他方、身振りは、イントネーションと同様、状況を外に開き、第三者—主人公—を導入する。身振りにおいては、攻撃あるいは防衛、脅迫あるいは愛撫などの萌芽がまどろんでおり、しかも観照者や聞き手に同調者や承認の位置があてがわれる。(バフチン p.28)

そして、やはりイントネーションの場合と同様に身振りは「状況を外に開く」と言っている。

また、こうしたイントネーションや身振りが能動的で客観的であるとも付け加える。

イントネーションや身振りの志向は能動的で客観的であることを忘れてはならない…。それらは話し手の受動的な精神状態を表現しているだけではない。そこには、外部世界やまわりの社会—敵、友、同調者—にたいする生き生きとした精力的な態度がつねにこめられている。ひとは、イントネーションや身振りを添えることによって、自分の社会的存在の基礎そのものによって規定されている一定の価値にたいして、能動的な社会的立場をとる。(バフチン p.29)

ここに言う「客観的」というのはイントネーションや身振りが現に表出として外部にあるということである。そして、それらにはそれらを取り巻いている外部世界や周りの社会に対する生き生きとした精力的な態度が込められているという意味で能動的だと言うのである。また、人は表出しているイントネーションや身振りによって自身の社会的立場、つまり自身が何者でありその何者かがどうなっているかの基本をも能動的に示すとバフチンは主張しているのである。そして、ここに言う「能動的な社会的立場をとる」というのも第5章での議論の重要点となる。

### 3-4 発話の社会的交通論

イントネーションの特性を当面まとめてバフチンは「言葉のなかでもっとも敏感で柔軟かつ自由な契機であるイントネーション上では、この社会的起源〔発話の社会的起源〕がいちばん明らかになりやすい」(バフチン p.30)と指摘し、イントネーション論の結びとして以下の2点を論じる。

具体的な発話は、発話の参加者たちの社会的相互作用の過程で生まれ、生き、死んでいく。発話の意味や形式は、基本的にこの相互作用の形式と性質によって規定される。発話を、発話を培っているこの現実の土壌から切りはなしたならば、われわれは形式への鍵も意味への鍵も失ってしまい、手中にのこるのは抽象的な言語学的外皮か、やはり抽象的な意味図式(古めか

しい文学理論家や文学史家たちの悪名高き「作品のイデー」だけである。(バフチン p.31)

発話の「理解」や「評価」と呼ばれているもの(同意と不同意)は、つねに言葉といっしょに、言語外の生活状況もとらえている。したがって、生活は外部から発話に影響をあたえるのではない。それは、話し手の周囲の生活環境と、この生活環境から生じてくる本質的な—発話の意味づけに不可欠な—社会的評価の共通性や一致として、内部から発話に浸透している。イントネーションは、生活と、発話の言語的部分との境界上にあって、あたかも生活状況のエネルギーを汲みあげて言葉のなかに移しているかのようであり、言語学的に安定したものすべてに、生きた動的な歴史的運動や一回性を添えている。結局、発話は、話し手、聞き手、主人公の社会的相互作用をみずからのうちに反映しており、それらの生きた動的な交通の所産であり、言語的素材上に生きた動的な交通を固定したものとなっている。(バフチン pp.31-32)

前者はイントネーションを枢要な要因に位置づけた発話の社会的交通論の表明であり、後者は発話の社会的交通論にイントネーションを位置づける議論である。イントネーションは「生活と、発話の言語的部分との境界上にあって、あたかも生活状況のエネルギーを汲みあげて言葉のなかに移しているかのよう」であるというわけである。

最後に、生活の中の言葉をめぐらした考察を文学の中の言葉を芸術の社会的交通論的に見るための橋渡しとして以下のように指摘する。

言葉とは、ある出来事の「シナリオ」のようなものである。言葉の総体的意味を生き生きとしたかたちで動的に理解するには、話し手たちの相互作用というこの出来事を復元し、いわば再びそれを「演じ」なければならないのであり、その際、理解者は聞き手の役割を引き受ける。だが、この役割を果たすためには、理解者は他の参加者たちの立場も明確に理解していなければならない。(バフチン p.32)

## 4 芸術(文学)の社会的交通論

### 4-1 文学の中の言葉

本稿の関心の中心は生活の中の言葉のほうにあるので、文学の中の言葉と文学の社会的交通論についてはごく概略のみ紹介することとする。

バフチンは、まず、文学の中の言葉の場合は生活の中の言葉の場合と違って、直接に見えたり知っていたりする言語外のコンテクストの契機に依存しているわけではなく、事物や身近な環境の出来事を対話者の間で自明のものに見なしてそれらに立脚するようなことはできないし、ほのかな暗示すらも言葉に加味することはないと言う(バフチン p.33)。しかるに、「文学においては、話し手(作者、筆者注)、聞き手(読者、筆者注)、主人公(いわゆる主人公と作品で語られる内容)ははじめて集い、たがいにかんしてなにもしらず、共通の視野ももっておらず、またそれゆえにかれらには立脚するもの、言外に示すべきものは一切ないということになるのであろうか」(バフチン p.33)という、そうではないと言う。

実際には、詩的作品(文学作品、筆者注)も発話されていない生活のコンテクストのなかに緊密に編み込まれている。ほんとうに作者、聞き手(読者、筆者注)、主人公が、どんな共通の視野によってもむすばれていない抽象的な人びととしてはじめて集い、辞典から言葉をもちだすようであれば、散文的作品すらまず得られないであろうし、ましてや詩的作品は得られないであろう。(バフチン pp.33-34)

そして、生活の中の言葉で重要な位置を占めていた社会的評価が文学の中の言葉でも関与していることを強調して以下のように主張する。

文学においてとくに重要なのは、言外に示されている評価の役割である。詩的作品(文学作品、筆者注)とは、発話されていない社会的評価の強力なコンデンサーなのであり、あらゆる言葉が社会的評価で充滿している、といってもよい。この社会的評価こそがその直接的表現として芸術的形式を組織しているのである。(バフチン p.34)

そのような意味でバフチンは「文学における言葉にははるかに大きな要求が課せられている」と言う(バフチン p.33)。

#### 4-2 芸術(文学)の社会的交通論

芸術(文学)の社会的交通論を提唱するにあたり、バフチンは、彫像を例に出してそれが社会的交通の中にあつて、社会的評価が関与していることを指摘する。

形式は素材の助けによって実現されており、素材のなかにとどめられている。しかしみずからの意味の面では形式は素材の枠を越えていく。形式の意味は、素材ではなく内容に関係している。たとえば、彫像の形式は大理石の形式ではなく人体の形式であり、その際それは表象されている人物を「英雄化したり」、「いつくしんだり」、あるいはことによると「おとしめている」(カリカチュア的なスタイルの造形)、つまり表象されているものにたいする一定の評価を表現している。(バフチン pp.35-36)

つまり、彫像という芸術作品では、大理石で形作られた像において、芸術家と対象(対象の人物とテーマ)と鑑賞者が創造的に会うのである。

以降、バフチンは生活の中の言葉と文学の中の言葉を対比しつつ文学の社会的交通論を展開するのであるが、本稿では先の「シナリオ」と関連づけて文学の社会的交通論の中心点を論じている以下の一節を紹介するに留める。

詩(文学、筆者注)においても言葉は出来事の「シナリオ」であつて、通の芸術受容者はそれを演じるのであり、言葉やその結合形式のなかに、作者とその作者が表象している世界との生きた独特の相互関係を敏感に見抜いたり、第三の参加者—聞き手—としてこの相互作用のなかにはいたりする。…生きた動的な芸術的受容や具体的な社会学的分析の場合は、(言語的素材のなかに反映され留められているにすぎない)人びと間の関係が明らかにされる。言葉とは、創造的受容の過程においてのみ、またしたがって生きた動的な社会的交通の過程においてのみ、肉づけされる骨格なのである。(バフチン

pp.38-39)

「人びと」が強調されているが、この場合の「人びと」は作者と読者と主人公(語られている対象や世界)であり、優れた芸術(文学)受容者は自身もその三項関係の社会的交通の中に入り込んで、そこで生まれ生成される出来事としての相互関係に能動的に参加して作品を創造的に鑑賞するというのである。そして、芸術(文学)の社会学は、芸術的に仕上げられた作品をそのような視座で分析するのである。

## 5 考察

### 5-1 対話の原型と対話原理の原点

本節では「生活の中の言語」論から導き出されるバフチンの言う対話の原型と対話原理の原点を提示する。それに関わるのは、言葉を「符牒」として見る見方である。「符牒」については、本稿の2-3で次のように論じた。

生活の中の言葉が「符牒」だというのは、評価的な側面をも含めた可能な共通の社会的視野と発せられた「符牒」の意味の可能性を発話の行為を契機として「合算」しながら、現下の契機に当てはまる社会的視野とそれに整合的に嵌まる「符牒」という総体としての解にヒューリスティックに到達するという形で、われわれは生活の中の言語活動に従事しているということである。

言葉を産出したり受容したりする言語活動に従事するというのは、概念や思考を言語に変換したり与えられた言語形式を概念や思考に解読したりすることや、あらかじめコンテキストを前提にして言語変換をしたり、言葉を解読した後にコンテキストの要因をかけ合わせてそれを解釈したりすることではなく、発話の契機に総体としての解を得ること、つまりバフチンの言う状況の完結(バフチン p.17)や状況の解決(バフチン p.19)をするということである。つまり、言語活動に従事するというのは、そのようなヒューリスティックな照準作業を、話し手と聞き手の双方で相互参照的にそして相互的に(つまり発話する主体を交替しながら)行うということである。

そして、そうした相互参照的で相互的なヒューリスティックスを相互行為の参加者のいずれもが話し手と聞き手と対象という三項関係での評価を基礎とした出来事の交渉（共感したり反発したり同意したり反論したりしながら何かについて話すこと）として、精力的にかつ絶えることなく行うことである。これがバフチンの言う対話の原型である。そして、人と人で行われる社会的交通をこのように人と人が生きることを相互的に営み交渉することとして見る視座がバフチンの対話原理の原点なのである。

## 5-2 人として生きることとイントネーション

次に、本稿の焦点である言葉（発話）と生活（“жизнь” (zhizn) あるいは“life”) の関係について検討する。バフチンは、この両者に関わってイントネーション論で以下の数節のように論じていた。いずれも本稿第3章での引用の再掲あるいは部分再掲である。そして、特に注目されるのは傍点部である。

イントネーションはつねに、言語的なものと非言語的なもの、言われたことと言われなかったことの境界上にある。イントネーションにおいては、言葉は生活と直接に接している。またなによりもまず、まさにイントネーションにおいて、話し手と聞き手は接している。イントネーションはとりわけ社会的である。(バフチン pp.24-25、本稿3-1の1つ目の引用)

生活のなかのことはにおけるイントネーションは、一般に、語よりもはるかに隠喩的であり、そこにはいわばまだ古代の神話創造的な魂が生きている。イントネーションは、話し手の周囲の世界が生命をもった諸力でまだ満たされているかのようにひびいている。…イントネーションは、生命をもたぬ対象や現象を脅し、怒らせたり、あるいは愛したり、いつくしむ。(バフチン p.28、本稿3-3の2つ目の引用)

そこには、外部世界やまわりの社会—敵、友、同調者—にたいする生き生きとした精力的な態度がつねにこめられている。ひとは、イントネーションや身振りを添えることによって、自分の社会的存在の基礎そのものによって規定されている一定の価値にたいして、能動的な社

会的立場をとる。(バフチン p.29、本稿3-3の4つ目の引用から)

イントネーションは、生活と、発話の言語的部分との境界上にあつて、あたかも生活状況のエネルギーを汲みあげて言葉のなかに移しているかのようにであり、言語学的に安定したものすべてに、生きた動的な歴史的運動や一回性を添えている。結局、発話は、話し手、聞き手、主人公の社会的相互作用をみずからのうちに反映しており、それらの生きた動的な交通の所産であり、言語的素材上に生きた動的な交通を固定したものとなっている。(バフチン pp.31-32、本稿3-4の2つ目の引用から)

これらは一体どのように解釈すればいいのだろうか。そして、より決定的な節は「生きたイントネーションは言葉をいわば枠外に導き出す」(バフチン p.23、本稿2-3の(3))と「身振りは、イントネーションと同様、状況を外に開き」(バフチン p.28、本稿3-3の3つ目の引用部)の部分である。ここに言う「枠外」とその「枠」、や「外に開き」と言う場合の「外」やその反対の「内」とは一体何なのだろうか。

人が人として生きることとはどういうことだろう。われわれは、ナマのままの自然の中で与えられた身体のままですれと切り結んで生きることを営んでいくわけではない。われわれは、人々が制作した多種多様な道具が配置された人々が作り上げた人工的環境を基盤とし、認識と規範の壮大な「殿堂」(バーガー, 1997, pp.30-31)を背景として、具体的な「今ここ」で、多かれ少なかれ具体的に他者と関わりながら、現下の現実という「楼閣」を築き上げ更新しながら生きることを営んでいる。第3章で論じたイントネーションに関連する共通の社会的視野や社会的評価、そしてクロスを支えなどはいずれも特定の発話の契機における「楼閣」の基層をなすものである。言語外のコンテクストとして説明されることもその一部となる。

一方でわれわれは現下の社会文化的な生きる環境で適応的に生きることに従事できるように身体的にも認知的にも訓育されており (Fuhrer, 2004)、そのような訓育され調律された身体でもって、認識と規範の「殿堂」を背景とし、作り上げられた人工的環境を基盤としながら、それらと切り結んで生きるこ

とを営んでいる。そして、そのような生き方においてわれわれは、そのように生きることを営んでいる存在として、さまざまな象徴を示し、象徴的に振る舞い、記号を産出し、それらを不断に交換しながら生きている。そうした中で、発話は対面的な社会的交通を運営するための枢要な要因となっている。

対面的な社会的交通で発せられる発話は、現下の現実という「楼閣」の頂点に示されその一部として包摂される「符牒」である。われわれは、イントネーションに含まれた「符牒」を足がかりとして「あなた」と「わたし」の現実を省略三段論法を伴いながら対話的に交渉しつつ、現下の出来事を相互的に構成し更新しながら、その現実の出来事に当事者として参加している。

そうした現実構成の営みの中でイントネーションは枢要な役割を果たしている。イントネーションは、生きる環境と切り結びながら人と人の中で生きていくことを示す息吹を体現している。われわれは他者においてイントネーションを通して生きていく息吹を感じ取るからこそ、他者を人として生きていく存在として受け入れて、イントネーションに体現されている息吹が指し示す方向で「楼閣」の基底を構築し、言葉を定位する。そうした息吹が、イントネーションに載った発話を仲立ちとした相互的な現実構成の必須の要因なのである。前節の引用の傍点部はそのような事情を表している。

### 5-3 イントネーションの本質

最後に、「枠外」とその「枠」、や「外に開く」と言う場合の「外」やその反対の「内」とはどういうことか、についてである。この場合の「枠」は物質的な自然を画している枠と考えることができる。ゆえに、「枠内」とは物質的な領界のこととなる。そうすると、イントネーションが「言葉を枠外に導き出す」や「状況を外に開く」として主張しているのは、イントネーションによってわれわれは物質的な領界から脱して人として生きる社会文化的領界に誘導され開かれるということになる。これを人を中心にして言うと、人として生きることの息吹を内包したイントネーションに載せて言葉を発しそれを取り交わすことを通して、われわれは物質的な領界から脱して人として生きる領界に相互に誘導し誘導され参入して、その世界で一つの人格として生きることを相互に可能にしているということになる。

このように、言葉を載せて運ぶ、生きることの息吹を内包するイントネーションは、一種の生き物として生きる存在（“жизнь”）であるわれわれを人として社会文化的に生きる存在（もう一つの“жизнь”）へと「変態」させる装置となっている。そのような意味で、イントネーションはある種呪術的であると言わねばならない。

## 6 むすび

単細胞生物から人間までのさまざまな生物の生き方と生きている世界を包括的に探究したマトゥラーナとバレーラ（1997）は、人間は社会を作って存在する動物の一種だが、人間に特徴的なのは、コミュニケーションを通じた行動の調整において新たな現象領域を生じさせたことだと論じている。それをかれらは言語域と呼んでいる。しかし、われわれが言語域を生み出し、個別の状況においても言語域を生じさせながら生きることを営んでいるとしても、そうしたわれわれの行動は生命を持つものすべてが従事している環境への適応行動の一形態であることに変わりはないとかれらは一貫して主張する。マトゥラーナとバレーラの見解を上級の議論に接続すると、われわれは自然のままの領域から脱して言語域という領域に参入して生きることを営む動物だということになる。われわれは言葉＝発話を交わして対話的に世界を構成しながら各自の独自に生きることをそこに切り拓くわけだが、その際に、人として生きることの息吹を吹き込んだイントネーションが、身振りや相俟って、われわれが言語域に参入するためのシフター（移行装置）となっているのである。そして、そのシフターは、他者への志向を含むとともに対象への志向も含んでおり、さらに当事者の社会文化的世界でのあり方も志向している。さらに、イントネーションと身振りは対話者間で共振しつつ対話者各自としても独自のイントネーションを響かせ独自の身振りを示すのである。イントネーションと身振りがそのように働き、またわれわれがそれらをそのように利用していることが、われわれが言語域で生きることを支える土台となっている。われわれはコロスを背景としながらイントネーションと身振りによって相互的に築かれるわれわれが存立する領界を他者とともに立ち現せつつ、やはりイントネーションと身振りを基本装置とし言葉を「符牒」として

時々刻々と現実を立ち現せつつわれわれ一人ひとりを相互的に存立させているのである。このように考えると、言語がまだ十分に発達しておらず主にイントネーション（叫び声のトーン）と身振りに依存して相互的に社会的交通を営んでいた原始の時代にまでバフチンは想いを馳せていたのではないかと想像される。

バフチンのイントネーション論を、このようにわれわれが社会文化的な動物として人として他者とともに生きることを営むことと絡めて理解してこそ、われわれはバフチンの言う対話の中核に迫ることができる。そして、対話をそのように把握してこそ、対話原理の真髄を知ることができるだろう。

#### 参考文献

##### 和文

- バフチン, M. (1920-24/1999) 「行為の哲学によせて」 (佐々木寛訳) 『ミハイル・バフチン全著作』第1巻、バフチン, M. 著、伊東一郎・佐々木寛訳 水声社
- バフチン, M. (1926/1979) 「生活の言葉と詩の言葉」 (斎藤俊雄訳) 『フロイト主義』磯谷孝・斎藤俊雄訳 (1979) 新時代社
- バフチン, M. (1926/2002) 「生活のなかの言葉と詩のなかの言葉—社会学的詩学の問題によせて」 『バフチン言語論入門』バフチン, M. 著、桑野隆・小林潔編訳 せりか書房
- バフチン, M. (1926/2001) 「生活における言説と詩における言説—社会学的詩学への寄与」 ツヴェタン・トドロフ著、大谷尚文訳 (2001) 『ミハイル・バフチン 対話原理』法政大学出版局
- バフチン, M.、北岡誠司訳 (1929/1980) 『言語と文化の記号論—マルクス主義と言語の哲学—』新時代

- 社
- バフチン, M. (1952-53/1988) 「ことばのジャンル」 (佐々木寛訳) 『ことば 対話 テキスト』バフチン, M. 著、新谷敬三郎他訳 新時代社
- バーガー, P. 著、藺田稔訳 (1997) 『聖なる天蓋—神聖世界の社会学』新曜社
- ホルクウイスト, M. 著、伊藤誓訳 (1994) 『ダイアローグの思想』法政大学出版局
- 桑野隆 (2020) 『増補 バフチン—カーニヴァル・対話・笑い』平凡社
- 西口光一 (2013) 『第二言語教育におけるバフチンの視点—第二言語教育学の基盤として』くろしお出版
- 西口光一 (2018a) 「人間学とことば学として知識社会学を読み解く」 『多文化社会と留学生交流』第22巻、pp.1-11
- 西口光一 (2020) 『第二言語教育のためのことば学—人文・社会科学から読み解く対話論的な言語観』福村出版
- トドロフ, T. 著、大谷尚文訳 (2001) 『ミハイル・バフチン 対話原理』法政大学出版局
- 英文
- Fuhrer, U. (2004) *Cultivating Minds: Identity as Meaning-Making Practice*. Routledge.
- Maturana, H. and Varela, F. (1992) *The Tree of Knowledge: The Biological Roots of Human Understanding*. Boston and London: Shambhala. 管啓次郎訳 (1997) 『知恵の樹—生きている世界はどのように生まれるのか』筑摩書房
- Vološinov, V. N. (1976) Discourse in life and discourse in art — concerning sociological poetics. In Vološinov, V. N. (1976) *Freudianism: A Critical Sketch*. Titunik, I. R. (trans.). Edited in collaboration with Bruss, N. H. (ed.). Bloomington: Indiana University Press.